２０２５年２月２３日　金沢文庫キリスト教会　２月第四主日礼拝

イザヤ書 第１０章 ５～１９節

5 災いだ、わたしの怒りの鞭(むち)となるアッシリアは。彼はわたしの手にある
憤(いきどお)りの杖だ。 6 神を無視する国に向かって／わたしはそれを遣わし／
わたしの激怒をかった民に対して、それに命じる。「戦利品を取り、略奪品を取れ
／野の土のように彼を踏みにじれ」と。7 しかし、彼はそのように策を立てず／そ
の心はそのように計らおうとしなかった。その心にあるのはむしろ滅ぼし尽くすこ
と／多くの国を断ち尽くすこと。8 彼は言う。「王たちは、すべて、わたしの役人
ではないか。9 カルノはカルケミシュと同じではないか／ハマトは必ずアルパドの
ようになり／サマリアは必ずダマスコのようになる。10 偶像を持つ国々／エルサ
レムにも／サマリアにもまさる像を持つ国々を／既に手中に納めたように 11 そ
して、サマリアとその偶像にしたように／わたしは必ずエルサレムと／その彫像に
対して行う。」12 主はシオンの山とエルサレムに対する御業をすべて成就される
とき、アッシリアの王の驕(おご)った心の結ぶ実、高ぶる目の輝きを罰せられる。
13 なぜならアッシリアの王は言った。「自分の手の力によってわたしは行った。聡
明なわたしは自分の知恵によって行った。わたしは諸民族の境を取り払い／彼らの
蓄えた物を略奪し／力ある者と共に住民たちを引きずり落とした。14 わたしの手
は、鳥の巣を奪うように／諸民族の富に伸びた。置き去られた卵をかき集めるよう
に／わたしは全世界をかき集めた。そのとき、翼を動かす者はなく／くちばしを開
いて鳴く者もなかった。」15 斧(おの)がそれを振るう者に対して自分を誇り／のこ
ぎりがそれを使う者に向かって／高ぶることができるだろうか。それは、鞭(むち)
が自分を振り上げる者を動かし／杖が木でない者を持ち上げようとするに等しい。
16 それゆえ、万軍の主なる神は／太った者の中に衰弱を送り／主の栄光の下に炎
を燃え上がらせ／火のように燃えさせられる。17 イスラエルの光である方は火と
なり／聖なる方は炎となって／一日のうちに茨とおどろを焼き尽くされる。18 森
も牧場も魂から肉まで焼き尽くされ／くずおれて、倒れる。19 森に残る木は数少
なく／幼子でもそれを書き留めうる。

ルカによる福音書 第１２章 １３～２１節

13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に
言ってください。」14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたが
たの裁判官や調停人に任命したのか。」15 そして、一同に言われた。「どんな貪
欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財
産によってどうすることもできないからである。」16 それから、イエスはたとえ
を話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17 金持ちは、『どうしよう。作物
をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、18 やがて言った。『こうしよ

う。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、19 こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』 20 しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

使徒言行録 第１２章 ２０～２３節

20 ヘロデ王は、ティルスとシドンの住民にひどく腹を立てていた。そこで、住民たちはそろって王を訪ね、その侍従ブラストに取り入って和解を願い出た。彼らの地方が、王の国から食糧を得ていたからである。21 定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、22 集まった人々は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。23 するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆(うじ)に食い荒らされて息絶えた。

「神の前に豊かになろう」

今週も、主イエスが復活された週の初めの日に、皆さんと共に主の日の礼拝をお捧げ出来ますことを感謝しています。

本日は、イザヤ書 第１０章５節後半以下を与えられています。冒頭に「アッシリアの傲慢」という小見出しがついています。アッシリアは、北イスラエル王国を滅ぼし、住民たちを捕囚するのです。それは、人間的な目で見れば、アッシリアが軍事力で優って北イスラエル王国を圧倒したのです。しかし、既に聴いてきましたように、実は、主なる神が、神に聞き従わない北イスラエル王国の王と民に審(さば)きを下すために、アッシリアを用いられたのです。アッシリアが主なる神の道具であることは、５節の言葉、「わたしの怒りの鞭(むち)となるアッシリアは。彼はわたしの手にある憤(いきどお)りの杖だ。」との言葉から分かります。しかし、そのように主なる神が用いようとされたアッシリアですが、彼らは主なる神が命じられたようには従わないのです。そのことが、７節で言われています。「しかし、彼はそのように策を立てず／その心はそのように計らおうとしなかった。」北イスラエル王国も、アッシリアも、神に従わないのです。その結果が１２節で言われます。「主はシオンの山とエルサレムに対する御業をすべて成就されるとき、アッシリアの王の驕(おご)った心の結ぶ実、高ぶる目の輝きを罰せられる。」そう言われています。主なる神は、神に従わない北イスラエル王国と南ユダ王国に審(さば)きを下し、国を滅ぼされるのです。そして、それが終わったら、今度はアッシリアに審きを下されるのです。「アッシリアの王の驕(おご)った心の結ぶ実、高ぶる目の輝きを罰せられる」のです。あくまでも神の道具であるアッシリアです。神

が用いてくださるのであって、自分たちの考えや思いで動いてはならないのです。それが傲慢であり、驕(おご)った心なのです。

人は何か他の人より優れた点があると、他の人にそこを見てもらいたくなり、自慢したくなります。そして、褒(ほ)めてもらいたくなります。さらには、驕った気持ちで、傲慢な思いで、事をなそうとするのです。昔も、今もそれは変わりないでしょう。そして、本日の箇所で言われているように、個人だけでなく、組織、国家もそうようになってしまうのです。そして、そのようになる者を、主なる神は罰せられるのです。

自分の才能などを賜物と言う場合があります。それらは、そもそも自分のものではなかったからです。神から、天から賜ったものなのです。そもそも命も神から賜ったもの、賜物です。私どものものは何もなく、すべて神から賜ったものです。そうであれば、自分の才能などを自慢するのは可笑しなことで、優れた才能については神がほめたたえられるべきなのです。

確かに人間的に見れば、どんな才能も、その人が必死に磨いて初めて輝き出すものでしょう。イザヤ書で言われているアッシリアも神の道具となるように国を強くしたのは、王や国民の業によるところが大きかったと思います。しかし、聖書が示してくれているように、物事の真理を知るには、人間的な目だけでなく、神の視点から見ること、すなわち、聖書が言っている視点で見ることが必要なのです。

ですから、アッシリアの傲慢は神の目から見れば、間違っていることです。私どもは、これを反面教師として、そこから学ばなければならないと思います。

本日、他に、ルカによる福音書の言葉と、使徒言行録の言葉を与えられています。

まず、使徒言行録を見てみましょう。ここに出てくるヘロデとは、ヘロデ・アグリッパ１世です。アグリッパ１世は、ファリサイ派に迎合して当時はまだユダヤ教の一分派であった初期キリスト教のグループを迫害します。ゼベダイの子ヤコブを捕らえて処刑します。そして、ペトロも彼により投獄さています。また、新約聖書と同時代の歴史家フラウィウス・ヨセフスの書物、「ユダヤ古代誌」によりますと、彼は若い頃から金遣いが荒かったそうです。ただ、本日の聖書箇所とは異なり、祖父のヘロデ大王と逆の穏やかな性格で謙虚で信心深かったそうです。ローマ皇帝であったカリグラが自分の偶像をエルサレムに立てるように命じた時、やめるように説得したり、律法に反したことをしているととがめられた時は素直に何がまずかったのか聞き入れるなどしていたとされています。ただ、ユダヤ人以外からはよく思われてなかったことも書かれており、「彼の死亡時にカイサリアとセバステの街の人々がそれを祝った」とされています。

本日の箇所では、こう言われています。ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、集まった人々は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けたのです。どうも人々は王を敵に回すことは得策でないと判断し、王をおだてたようです。するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒したのです。聖書はその理由をこう言います。「神に栄光を帰さなかったからである。」そう言うのです。この記事の前の出来事も読むと、ヘロデがとても傲慢であったことが分かります。誰でも王という地位に登ると、高慢にな

りやすくなってしまうのでしょう。そして、神に栄光を帰すことをコロッと忘れてしまうのです。神に栄光を帰し、神の前に豊かになることこそが、人としてあるべき姿なのです。貪欲に自分の栄光を求めても、本当の喜びは得られません。神に栄光をお捧げし、神の前に豊かになり、神の祝福を頂いてこそ、いつまでも変わらない幸いを手に入れることが出来るのです。

では、本日与えられましたルカによる福音書に目を向けましょう。この譬え話に登場する人は、ある意味、堅実な人です。現代であれば、良き経営者、成功者と言えるでしょう。多くの人は、そのようになるために、人知れず、陰の努力、苦労をしています。これはあくまで譬え話ですが、彼もそうであったでしょう。その点では、人々から賞賛されても可笑しくなかったと思われます。

しかし、終わりの２節、２０節と２１節でこう言われているのです。「しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」そう言われているのです。彼は、本日の使徒言行録の記事に登場するヘロデのように傲慢には見えません。しかし、彼も、神に栄光を帰すことを忘れ、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならなかった」のです。その意味では、傲慢で、神の前に驕(おご)っていたと言えるでしょう。

かつて、私がいました教会の教会員の中に、教会の役員をされ、教会学校の教師としても熱心に奉仕してくださり、お仕事の学校の先生としても熱心に教えておられた方がいます。純粋に子どもたちを愛していらっしゃいました。残念なことに、白血病になり、主の下に召されました。彼は、誰に対しても謙遜でいらっしゃいました。曲がったことはお嫌いでしたが、他の人を非難するようなことはなさいませんでした。葬儀の際、ご長男が、「父から、誰に対しても謙遜に対応するよう教えられました」とおっしゃっていました。勿論、彼も完璧な人間ではなかったでしょう。しかし、私は、彼に、信仰者としての生き方の一つのお手本を見せて頂いたと思っています。私にとって、彼の生き方は大きな信仰の遺産だと思っています。私はその遺産を受け継いでいきたいと思っています。

私どもも、驕(おご)る心を捨て、謙遜に、神に栄光を帰す生き方を、神の前に富む生き方を、してまいりましょう。

祈りを捧げます。

私どもの救い主、主イエス・キリストの父なる神よ。私ども人間はすぐに付け上がり、高慢になります。あなたからの賜物を、自分自身のもののように誇ります。その行き着くところは、神の審きと滅びです。どうぞ、早くそのことに気付かせて下さい。悔い改めて、あなたに立ち帰り、あなたをひたすら求めて、従う者とさせてください。そして、あなたに栄光を帰し、あなたの前に富む者とさせてください。主のみ名によって祈ります。アーメン。

派遣の言葉

司式者）主は言われます。「わたしは誰を遣わすべきか」。
会　衆）わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。
司式者）キリストの平和の使者として、行きなさい。（イザヤ書 第６章８節による）

祝祷

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし／あなたに恵みを与えられるように。
主が御顔をあなたに向けて／あなたに平安を賜るように。（民数記 第６章２４～２６節）
主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
　あなたがた一同と共にあるように。　（コリントの信徒への手紙 二 第１３章１３節）
アーメン。

２０２５年2月２３日
招　　詞　民数記 第１２章３節
交読詩編　第１１編１～７節
聖　　書　イザヤ書 第１０章 ５～１９節
　　ルカによる福音書 第１２章 １３～２１節
　　使徒言行録 第１２章 ２０～２３節
説　　教　「神の前に豊かになろう」
讃 美 歌　２１－２８
　　２１－２８９
　　２１－４６１（1、3、4）
　　２１－１４１（1、4、5）
　　２１－２４